

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：87101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720314

研究課題名(和文) 近世後期日朝間における情報流通の研究 対馬藩宗家史料を素材として

研究課題名(英文) Study on Communications between the Japanese and the Korean King during the Late Early Modern: Studies using Tsushima So family documents as research materials

研究代表者

守友 隆 (MORITOMO, TAKASHI)

北九州市立自然史・歴史博物館・その他部局等・研究員

研究者番号：60610847

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：西洋列強の外圧がアジアに迫りつつあった江戸時代の後期、幕府や諸藩の為政者は中国(清)や朝鮮半島(朝鮮王朝)における事件情報を求めた。その情報収集には対馬藩の出先機関である倭館に赴任した対馬藩士が当たった。対馬藩は自藩にとっての利害得失を考慮しながら、その情報を幕府に提供し、または自藩内に留めた。そうした藩という組織の動きと同時に、藩士は自身と思想を同じくする他藩士と情報交換を行った。長崎の出島からの情報と同様に、対馬(倭館)からの情報は幕府・諸藩にとって重要であった。対馬藩の藩政史料のうち、同藩の倭館で作成された事件情報の報告書と幕府への届書の双方の検討から上記のような結論を出した。

研究成果の概要(英文)：Tokugawa Shogunate and Feudal Clans wanted more information about the Qing Dynasty and the Korean King on Edo Latter Period. Information was gathered by Feudal Retainers of Tsushima Domain who assigned to Wekwan. Tsushima Domain decided whether to report on Information to Tokugawa Shogunate or to cancel while considering the advantage and disadvantage for Tsushima Domain. On the other hand, Respective Feudal Retainers of Tsushima Domain interacted with Feudal Retainers Outside Tsushima Domain. Information from Tsushima and Wekwan was important like Information from Dejima, Nagasaki. It is to have examined historical materials of Report made at Wekwan and Report to Tokugawa Shogunate.

研究分野：人文学

キーワード：情報流通 海外情報 対馬 韓国 日韓交流

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究開始以前、私は薩摩藩・福岡藩の国内政治情報収集について、特に藩の政治を主導する為政者層(武士)ではなく、庶民がその収集に深く関与した事例を分析し、庶民ととりわけ街道におかれた宿場の役人(宿庄屋・町年寄など)、海運業者やその配下の船頭が高い情報収集能力を有していたことを明らかにした(拙稿「幕末期の国内政治情報と北部九州 筑前国黒崎桜屋・豊前国小倉村屋の「注進」行為について」、『交通史研究』第72号、交通史研究会、2010年)。これは、日本近世史における情報研究の現状で、全国各地、地域の庶民の情報ネットワークを解明することが重視されていたことによる。しかし、他の研究者の対象は庶民間での情報流通であり、あるいは知識人間での流通である。それらは江戸時代の身分秩序からいうと、横のつながり、横の情報ネットワークを明らかにするものであった。けれども、私は縦のつながり、すなわち藩の御用達商人や藩の役人(宿庄屋・町年寄など)に任命されている者が、藩上層部に先んじて情報を入手し、その情報を上申(「注進」)することを明らかにした。それはトップダウンではなくボトムアップ、近世の身分秩序における下位の庶民から上位の為政者への情報の流れである。

(2)上記の成果からもわかる通り、身分制社会であろうと上位者が必ずしも情報を独占しているわけではない。上位者は支配体制の維持のために情報を独占しようと努めるが、それには限界がある。また、下位者も無分別に情報を上位者に提供するわけではない。そうした観点から幕末期の対馬藩における御家騒動の結果、世継ぎとなった宗善之允(のちの義達)が幕府から世継ぎと認められるまでの対馬藩と幕府との交渉を分析した(拙稿「幕末期対馬藩主宗義達(善之允)の「嫡子成」における江戸藩邸・国元藩庁と幕府との折衝・情報伝達」、『比較社会文化研究』第29号、九州大学比較社会文化学府、2011年)。その結果、対馬藩が幕府との交渉の過程で、藩主の子息のすり替えを行ったことを明らかにした。すなわち、善之允は三男であるにも関わらず次男とされたのである。つまり、実際の次男の存在は抹殺され、それが公然と幕府に届け出られて世継ぎに認定される、ということを示した。つまり、為政者層においても下位の藩が上位の幕府に対し、自藩の都合のよい情報だけを報告していることを明らかにした。また、そうしたことがまかり通ったのは、対馬藩が朝鮮外交の実務を担い、さらに幕府にとって中国(明・清)・朝鮮(李氏朝鮮)情報入手の重要なチャンネルであったためではないかとの仮説を立てた。

(3)江戸時代の日本は、従来「鎖国」制下にあって閉ざされていたとされたが、近年は対

外関係史の分野から、そのようなことはなく、四つの口、すなわち、オランダ・中国との貿易が行われた長崎(出島)、琉球を統治下に置いた薩摩、蝦夷地との交易が行われた松前、そして朝鮮との外交が行われた対馬(朝鮮半島の倭館)で外国との交流があったと指摘されている。情報研究の分野では、オランダ商館長の日記が日本語訳され、また、オランダ商館長から幕府に提出されていたオランダ風説書の分析がなされている。さらには、オランダ人との通訳を務めたオランダ通詞と西国諸藩(薩摩藩など)の情報交換などが明らかにされている。だが、それらは長崎、そして相手国はオランダが中心である。

2. 研究の目的

(1)本研究は近世日本における海外情報の入手、具体的には「鎖国」制下、四つの口の一つである対馬、具体的には対馬藩の出先機関である倭館を含む朝鮮 対馬(対馬藩庁・江戸の対馬藩邸)幕府間の情報流通の実相を明らかにする。それは、対馬藩が幕府にとって中国(明・清)・朝鮮(李氏朝鮮)情報入手の重要なチャンネルであったためではないかという仮説を証明することでもある。

(2)それには長崎県立対馬歴史民俗資料館(「宗家文庫」)、大韓民国国史編纂委員会(「対馬宗家文書」)など国内外に所蔵される対馬藩宗家の藩政文書(対馬藩宗家史料)を用いる。とりわけ、対馬藩が幕府に提出した朝鮮・中国(清)を中心とした大陸の情報に関する報告書を解読・分析することにより、長崎・薩摩・松前からのもとは異なる、対馬を中心とした江戸時代の情報ネットワークを解明する。

3. 研究の方法

(1)対馬藩宗家史料から中国(清)・朝鮮の事件情報、具体的にはアヘン戦争・太平天国の乱・アロー戦争などの海外情報が対馬口からどのようにして江戸幕府に伝わったかを解明する。特に現在日本史だけでなく東洋史・朝鮮史においても重要と評価されている事件情報を対象とするのは、それらに関しては、通常よりも情報流通が活発化し、分析が比較的容易と考えるからである。

(2)具体的な方法としては、まず対馬藩から江戸幕府に上申された情報を解明する。そのために「公儀被仰上」という表題の史料を中心に分析を進める。同史料は対馬藩江戸屋敷から江戸幕府への届書をまとめた史料である。この史料から対馬藩江戸屋敷 江戸幕府へと伝達された情報の内容と伝達された時期を押さえる。ここで、同史料の解読と同時にデータベースを作成する。

(3)次に、情報の流れをさかのぼって、対馬本島(府中の藩庁)に朝鮮(釜山)にある倭

館からどのように情報が伝達されたかを明らかにする。それには対馬藩庁の表書札方、奥書札方「毎日記」を用いる。上記の「公儀被仰上」から作成したデータベースをもとに、当該期の「毎日記」記事を探りあてる。

(4)さらに、上記の成果をもとに倭館の館主（対馬藩からの出向者代表）日記から、中国（清）・朝鮮からどのような経路でどのような情報が入ってきたかを解明する。

(5)最終的に、対馬口から日本に流入した海外情報をもとに対馬藩・江戸幕府などがどのような政治・外交政策をとったかを明らかにし、その評価を試みる。

4. 研究成果

(1)2012 年度の成果

国内外に点在している対馬藩宗家文書のうち、幕末情報関係のもの所在調査を行った。2012 年 5 月上旬に韓国国史編纂委員会、10 月中旬に長崎県立対馬歴史民俗資料館にて史料調査を行った。

各所蔵機関においては文書目録を作成・公開しているが、内容まで詳細に採録しておらず、目録から見出すことは難しい。また目録にある史料の表題は「書状」・「覚」などと内容が推測できないもののなかに幕末情報流通関係のものも多くあり、史料を 1 点 1 点調査し、幕末情報流通関係のもの目星を付けた。

韓国国史編纂委員会は、朝鮮の歴史を研究する為に設置された大韓民国の国家機関である。戦前、日本の占領下にあった朝鮮史編修会の資料を引き継ぐ形で戦後に設置された。朝鮮史編纂当時、朝鮮総督府および朝鮮史編修会が旧対馬藩主の宗家から購入した近世日朝関係史に関連する史料数万点（「対馬宗家文書」）が韓国側に接收され、現在もソウルの韓国国史編纂委員会が所蔵している。同所の調査ではこの「対馬宗家文書」の、とりわけ江戸時代後期のアヘン戦争、アロー戦争（第二次アヘン戦争とも呼ばれる）などの海外事件情報が朝鮮王朝 対馬藩（倭館・対馬藩庁・江戸の対馬藩邸） 江戸幕府の経路で、朝鮮から日本に流入したことがわかる文書を中心に調査した。その結果、「北京筋兵乱之風聞之趣」、「唐兵乱之儀」などと記され、アヘン戦争に関する情報が朝鮮王朝の通訳から対馬藩の通訳に伝えられ、日本に流入したことがわかる史料を発見した。

幕末情報流通関係のもの多くは「御内用」・「御内用答」という表題の書状に多くあることが明らかになった。そしてその多くは長崎県立対馬歴史民俗資料館、韓国国史編纂委員会に所蔵されていることがわかった。

(2)2013 年度の成果

本年度の研究では、「太平天国の乱」という反清朝の革命運動に関する情報流通に注

目して研究を行った。言うまでもなく、江戸時代を通し、日本（対馬）と李氏朝鮮との情報流通は常態的であったろうが、東アジアに大きな変化をもたらす事件が頻発し、情報流通が活発化する幕末期、特に清で起こった「太平天国の乱」の事件情報に焦点を絞り、対馬藩（朝鮮半島の倭館・対馬藩庁・江戸の対馬藩邸）が海外事件情報をどのようにして入手し、それをどのように用いたかの解明を試みた。

具体的には、清国内 李氏朝鮮の役人 倭館（朝鮮半島） 対馬藩庁 対馬藩江戸藩邸 江戸幕府というルートでどのように伝達されていったかを長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵「宗家文庫」、大韓民国国史編纂委員会所蔵「対馬宗家文書」などを用いて分析を行った。

対馬藩の出先機関、朝鮮半島の倭館では対馬藩の役人が「太平天国の乱」情報の収集活動を積極的に行っていたことが明らかになった。その一方で、李氏朝鮮政府は「太平天国の乱」情報が倭館（対馬藩ひいては日本）に伝わる（漏えい）することを警戒していた。それは清と李氏朝鮮との関係性（冊封関係）のためであったと結論付けた。

(3)2014 年度の成果

本年度は、慶応 2 年（1866）朝鮮で起こった丙寅洋擾に関する史料を中心に調査を行った。

対馬藩宗家は、幕府に対し、自藩自家の重要性をアピールするために、迅速に正確な情報を提供しようとしたことは、先行研究でも言及されているし、「太平天国の乱」情報の扱い方からも明らかである。だが、慶応 2 年（1866）の 丙寅洋擾 の情報については、幕府（江戸の老中、長崎の長崎奉行）に対し伝達を遅らせる、他藩（佐賀藩鍋島家）から情報を入手しても幕府（長崎奉行）には伝えないなどの情報操作を確認できた。ただそれは、大島友之允（正朝）を始めとする対馬藩は、幕府に朝鮮とフランスの紛争を調停させることを成功させようとする強い意図があったためと考えられる。そのために情報操作が行われ、丙寅洋擾 と同年に起こった第二次幕長戦争とその最中に 14 代将軍徳川家茂が病没し、幕威が衰退したことは対馬藩と幕府との 丙寅洋擾 情報の受発信には影響を及ぼしていないと結論付けた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

守友 隆「幕末期対馬藩を中心とした海外事件情報流通」第 15 回七隈史学大会第一分會(日本史) 2013 年 9 月 28 日 於

福岡大学文系センター棟 15階第5会議室

守友 隆「幕末期対馬藩の海外事件情報の受発信 慶応2年(1866) 丙寅洋擾の情報を中心に」平成26年度九州史学会日本史部 2014年12月14日 於九州大学箱崎キャンパス法文系講義棟 102番教室

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

守友 隆 (MORITOMO TAKASHI)
北九州市立自然史・歴史博物館・その他部
局等・研究員(移行)
研究者番号：60610847

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：